

ヘブライ人への手紙に学ぶ

2024年03月

1996年1月から1998年10月

写者 小原靖夫

第32回（最終回）イエスを見つめながら走り抜こう ヘブライ人への手紙12章①節～③節

- ① こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびたしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか、
- ② 信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。このイエスは、御自身の前にある喜びを捨て、恥をもいとわないで十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになったのです。
- ③ あなたがたが、気力を失い疲れ果ててしまわないように、御自分に対する罪人たちのこのような反抗を忍耐された方のことを、よく考えなさい。

1. 今まで約3年間、皆様と共に「ヘブライ人への手紙」というテキストについて学び続けてまいりました。今日は最後にもう一度これをまとめてみることで、この時が与えられております。
2. 第6章の学びのところまでは、前半で一つのまとめの時を持ちましたから、それから後の部分に触れながらお話を進めて行ったらいいのかなと思います。

全体的なことを申しますと、この手紙では、先ず、第1章の①節から4章の⑬節のところで、「神の言葉(御言)への従順」あるいは「言葉への服従」ということが中心に書かれています。

第4章の⑭節から10章の㉑節くらいまでは、

「大祭司キリストを見上げつつ、恵みの座に近づこう」という「呼びかけ」がなされています。ここでは「キリストという御方を『大祭司と位置づけている』ところに一つの特色がある」と考えて頂いてよいと思います。その「キリストを見上げる」信仰は、えてしてそこで終わってしまうのですが、このヘブライ人への手紙では「見上げるだけではなく、御自ら神が備えてくださった、その恵みの座に大胆に近づこうではないか、という『積極的な神への応答行為』がきちっと方向付けられている」のです。

それは他の色々な箇所でも出て来るわけですが、少なくとも旧約の諸制度にある程度依拠しながら、この論を進めています。この手紙の中では、その律法によって養われてきた古

いユダヤ人たちに特徴的な生活習慣とか信仰形態に対して「そこに留まっているだけでは恵みを受けたことにならないのですよ、恵みが本当に神の御恵みとなるためには、そこから立ち上がって、御座に近づく行為が生まれて来ない限り、信仰は生きたものにはなりません」と語っているあたりに大きな特色があると思うのです。

それで、この大祭司論の中で、特に第7章のところでは「メルキゼデクという大祭司が登場して来る」わけです。

その次の第10章の⑩節から13章の⑬節まであたりでは、上記の理論を引き継ぎ、更に新約的に発展させ、「耐え忍んで今の営所の中、一応の安全地帯に留まりましょう」ではなく、「信仰の勇気を奮い起して、営所の外に出て、そこで辱めを受けるようなことがあっても、御心に適うことをしようではありませんか」という呼びかけがなされています。そのことが正に、あのゴルゴタの十字架のイエスに私たちが心服し寄り頼んで生きる、十字架のイエスそのものを救い主として全きに受け入れることへの『訴えになっている』、そう言ってもいいと思います。

あと終わりの部分は、ご承知のように第13章の⑭節以降で、「大祝福と言いましょか、祝祷の中にあります『祝福の祈り』と、『終わりの挨拶』とがなされている」と、大きく見ればそのような構成になっていると思われま

す。そういうヘブライ人への手紙は、他の聖書の書簡と比較して見ると、際立った一つの特色として、信仰生活を長いこと営みながらも、重なる試練や自分たちの怠慢や罪の様々な誘惑の中で、指導者や教友(信仰の交わりの中における本当の友達)との出会いが少ないところから、信仰生活に緩みや迷いが生まれて来る、そうした動揺しがちで非常に危険な状態に立っている信徒を叱咤激励するためにも書かれたものではないか、と思われま

す。言い換えれば、「社会的な罪を犯すことはないが、知らずして神への罪を冒し続けており、何となく信仰はもっているけれども押し流されてしまいがちな人々、あるいは、今、正に近づいて来る迫害を想定して、そのことにおびえて一步も前に進めないでいるような人々に対して書かれた一つの勧告であり、手紙である」と見ることができます。

ですから、これをそのように捉えて見ると、この手紙は『非常に神学的な論述がなされている』のです。律法の中の細かい事柄を述べてもいますが、実際には、実践的な目標に絶えず結び付くように意図され、語られています。もっと別な言い方をすれば、「この手紙が発信している信仰への勧告は、今あなたがたがそう生きることによって意味をもち、深まってゆくことになるのだという『非常に具体的なアプローチ』がなされている」と思います。

今読みました第12章でも、「私たちはたくさんの信仰の先達に囲まれているので、彼らが歩んだ全行程を見つめる時、あなたがたがもっているすべての重荷や絡みつく罪をかなぐ

り捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか」という『勧め』になっているのです。

あなたがたの先祖たち、旧約聖書において告げられている先祖たちはこんな生き方をしましたと語ります。そこで言うこんな生き方というのは、信仰に生きたということですが、その信仰に生きる時には先ず、現在の教会で言うならば「イエス・キリストという御方について知っている」ということが問題になります。

「知っている」という言い方は、いろいろな内容を持っていますが、例えば「イエスという人はどういう経歴を持った人だか知っている、どういう歩み方をした人間だか知っている、あるいは、どのようにして御生涯を全うされた御方であるかは知っている、その御方の御生涯によって、私にどういう関係をもたらせてくださった御方であるかも知っている」、そういう『知っているっていう知り方』もあるわけです。

しかし、この手紙の著者に言わせると、そういう知り方は「人格的な知り方」ではなく、モーセの十戒のように石の板に刻まれたものであって、実際的なものではなく、あなたの心の肉皮に刻まれていなければ、それは意味を持たないものなのです。つまり「外側に見える形にではなく、心の中で、体の中で、生活の中で生きて働いて、その事柄を表現しているようなものでなかったならば、それは意味がない」と言うのです。

言い換えれば、「イエス・キリストを人格的に捉え、イエス・キリストと出会っていないならば、あなたがたが信仰をもっているとは言えないのですよ」と言っているのです。

例えば、「信仰とは」（第11章）というところから始まっている箇所、信仰の先達の名前が次々に挙げられて来ました。その中のアブラハムにしてもイサクにしてもモーセにしてもそうですけれども、彼らは神を知っていた、いや、神から知られていたと言ってもいいですね。

神から「知られる」ことによって、「神との関係を新しく開始した」のです。しかもその関係は「神はこう言いました、こうしてくれます、だからそれを信じて待ちましましょう」という生き方ではなく「神が関係をもたれて、神が命じられたことに対しては否応なしに服従していった。そうして、神の御言の正しさを、自分が生きて行く上で確認していった」のです。

ノアもそうなのです。山の上で舟を造りなさいという、突飛なことを命ぜられたけれども、神が仰ったのだからと、それを自分の使命として山の上で舟を造った。そのことによって、ノアは神と人格的な関わりを持ったのです。そのように「応答のない信仰は、信仰ではないですよ」と、この著者は言っているわけです。

そうやって来ると、この手紙は基本的には、ヘブライ人であると自称している人たちに対して「お前たちは、真のヘブライ人ではない」と言っていることになります。「律法を持つ

ている、だから優れているのだと考えている」それじゃあ何にもならないのだ。実際に生きて、優れているところがすべての人から認められないならば、それは優れていることにはならないのだ。

選ばれたと自分で幾ら公言しても、自分が選びの道を生きて見せて「ああ、なるほど、あの人は神から選ばれた違う人なんだな」と言われるのでなければ、駄目なんです。

例えば、アブラハムにしてもイサクにしてもモーセにしても、皆そうであった。

彼らは、あなたがたの目に見える形で「そのことに応答して生きた」ではないか。

それをしていないなら、神を知っていることにはなりませんよ。「いわゆる神学に通じれば神を知っているのだとか、信仰箇条がわかれば神を知っているのだとか、そういうようなわかり方は意味をもたないのですよ」と言っているのです。

その辺になると、いわゆるカテキズム教育はどうなるのかな、という問題が出てきそうですが、この手紙の中では『カテキズムは必要だ』と言うのです。「律法はいらない、儀式もいらない」とは言っていないのです。

そういうものは、必要であり意味を持つのだが「それがあなたのものになるためには、それを生きて行動し、恵みを恵みとして感謝しつつ生きることではなければ、信仰は信仰ではありませんよ」と言っています。

おびえおののいて、大きな力で絶滅させられるのではないかと考えているような人たちに対して、イエスは何と言いましたか？

「身動きできない程の重い罪や、絡みつく様々なしがらみを持っていたとしても、それを全部、わたしキリストに委ねるなら自由になるのです、そんなものに支配されなくなるのです」と言っているではありませんか。

「あなたがたが自由に動けないのは、このわたしの御言を信じていないからではないですか？」という形で、事を揺り起こしてゆかれるわけです。

「神の御言を信じることは、その御言を受け入れ、それに応答することだから、あなたがたがもっている一切の重荷、からみつく罪を全部キリストにあずけなさい、その時始めてキリストとあなたとの生きた関係が始まるのですよ。聴いた時、知った時ではなく、聴いて知ったことを具体的に行動にした時に、始めて信仰は信仰になるのです」という言い方をしているのです。

ですから、そういう意味で、「御言が語られた」ということが冒頭にあった部分ですが、御言は色々な人々を通じて語られたけれども、皆「聞き置いておくという形だけ」に留まった。つまり、多くの人々はそれを心に留め、念頭に入れ、生活の箇条として書き記したけれども、それをその通りに生きはしなかった。

そこが難しいところですね。聴いたけれども、それに応答はしなかった。素晴らしいとわかっていたけれども、本当にその素晴らしさを真から喜ぶところにまでやってみなかった。

そこで、神は最後に「それでは誰かを仲介して語ったのでは駄目だろう、直接顔と顔とを合わせて語れば従って来るに違いない」と、御子をこの世に送ってくださった。けれども多くの人々は『御子とやらのメシアの出現を知ること』で満足し、『御子と出会うこと、イエス・キリストと人格的に交わること』を必要としなかった。これが実は『御降誕の夜の出来事』でもあるわけです。

長い間メシアを待ってはいたが、メシアが本当にお出でになったには「いや、私たちはメシアを待っていればよく、私たちのメシアは何か良いことをしてくれるに違いないから、旅籠屋の家畜小屋に産まれた赤ん坊なんか、どうでもいいのだと、地の民の羊飼いと異邦人たち以外は誰も行かなかった」という現実がそこに出て来るわけです。

結局、「出会いたいと願っている者たちに、出会うチャンスを神はくださったにもかかわらず、出会おうとしない『私たちの姑息さ』と言うのでしょうか、そういうものが信仰を妨げているのです。それが、恐れの原因や慄きの原因になり、脅えの原因にもなっているのだ」そういうことをとことん色々な形で突いてくるわけです。

その気づきのきっかけとして神が置かれたのが、後半で言うならば「サレムの大祭司メルキゼデク」ですね。その名は「義であり平和の主、王」というような意味を持っています。（彼は、キリストの予型とも言われています。）そういう御方、私たちが徹底的に支え調べてくださり、導いてくださる御方が、神によって遣わされ、その御方はすべてのことを完璧に全うしてくださったにも拘らず、その結果と言え、私たちのために完全な道が用意されたと認めもしないし、そのことによって自分を今その道に歩ましめようとしなない「人間の怠惰さ」。それが今、あなたがたが信仰の中で動揺を来たしている原因ではないですか、と迫られているのです。

この時代を考えると、本当に今私たちが生きている時代と同じような問題があったと思うのです。例えば、当時の彼らの教会がもっていた倫理観、社会観、世界観、価値観などが、教会を取り巻く外の社会では全く通用しない世界。それを当時の表現で言うならば「彼らのヘブライズムというものが全く受容されないヘレニズムの社会」の中で生きていたということです。

今も「私たちがキリスト・イエスによって生きているならば、すべてのことは解決済みだから、そんなことでくよくよすることは止めましょう、神が求めていらっしゃるの細かい枝葉末節に関する問題ではなく、あなたの体を生きたいけにえとして神に献げることですよ」と、この世に向かって語っても、ほとんど受け入れられない状態ですね。

そういう現実の中でこの手紙の著者は「そういう現実があって、それがあなたがたに絡みつき、しがらみになっているから信仰生活は成長していないのだ。イエス・キリストが十字架の上で贖ってくださったということは、知識ではないのだ、贖ってくださったと信じるのだったら、あなたは本当に贖われた喜びによって生きていますか？ 目の前に置かれた一切のことが、あなたがたにとって問題ではなくなっていますか？ そういうものに振

り回されていませんね。もしそうでないとしたら、あの贖いの十字架のイエスに、本当には出会っていない。だから、出会うために自分を献げて、イエスの許に行きなさい」と、言っているのです。

ここでは、私たち自身を罪のいけにえとして献げるのではなしに、「キリスト・イエスの招きにお応えする存在として、無条件で神の御前に自らを提供してゆく」そういうことなのだろうと思います。

ある使徒教父の説教の中で、この手紙と関わりを持ちながら語られた面白い説教があります。そこでは「私たちは、進んでイサクにならない限り、本当の信仰は身につかないでしょう」と言っているのです。

あなたがたを自ら燔祭のいけにえとして献げることを神は求めておられないけれども、あなたを献げなさいと仰った御方に対し「どうされても構いませんと、自分を先ず祭壇の上に載せてゆく」それが、あなたがたが自分を神に献げることなのです。その時、神はすでに代わりに献げるものを用意されておられ、「献げられたイエスの血潮のゆえに、もうあなたは要らない」と仰って、あなたを既に献げられたものと見なされて、新しくこの世に送り返してくださるのだ。その「神から送り返された者として生きることがなければ、あなたがたは信仰には生きていないのです」と述べています。

今日の教会では「派遣」ということをよく言います。遣わされた者としてこの世に出て行かねば、ということで、これと同じことです。

「遣わされた者として」という時に、何も持たない者を自覚し、本当は私がいけにえであって、あの上で焼き尽くされなければならない存在であるのに、生きて人々の前に遣わされているのだという、神から担わしめられた責任、使命を強く感じないで遣わされているとするならば、それはやはりこの世の中で挫折してしまう信仰でしかないだろう。

換言すれば、私が今ここに立っているのは、イエスが十字架の上でこの私のために血を流してくださったからだということを、自分の今生きるという現実の中にしっかりと刻み込んで生きていなかったならば、それは滅びにしかならないことを語っているのです。

だから、この手紙は、そういう意味では「律法的な一面」を見せ、かつ「福音的な神の憐れみと恵み」によって、もう一度新しく造り直し、練り直してくれる、すごい書物であると思うのです。

8章あたりのところでは、あえてそういう意味も含めて「古い契約と新しい契約」という言葉を繰り返して使っています。

新しい契約は何かというと、それはあくまでも契約ですから、「神と人間との関係」です。しかも旧約と同じように、新しい契約を結ばれたことは、私たちが求めたのでもなければ、立派だからとか、一人前だからとか、その契約を結ぶに相応しい存在だからだということではなしに、「神が一方的に憐れんでくださり、愛して下さって、私たちの間に与えてくださった契約」なのです。

しかし、どんな理由で契約が与えられようと、その契約を承認し調印した、受け入れ

た以上は、その契約に拘束されて生きるのが当たり前なのです。「それを覚えて今生きていますか、その契約の拘束を、本当に身にしみて感じながら今を生きていますか」という問いが、この手紙には出て来るのです。

その契約ということの中の最後の部分に出て来る、イエスが本当に苦しまれたのは、神の聖所の置かれた場所ではなく、『聖所の外、神を知らない、神を受け入れない現実の中』なのです。そういう現実の中で、十字架にお架かりになり苦しまれたのだから、私たちもイエスに従って生きようとするならば、『現実の中で生きること』が大事なのです。

それは「教会が、単なる仲良しクラブになってはいけないのだ」ということなのです。教会の中に、現実のドロドロしたものが持ち込まれてもいいのです。しかしそれがどれほど持ち込まれようと、その量が大きくなろうと、「すべてはイエス・キリストの十字架によってもう解決済みなので、それがあなたがたを束縛したり、揺さぶったり、行動を制限付けたりする力にはならないのだ」というそのことを承知して立ち向かって行きなさい。そしてそれは「現実のドロドロしたもののために悩み苦しんでいる人々を救い上げるために、イエスと一緒に成すべきわざを共に担って生きる恵みにあずかっているのだから」という「極めて宣教的な伝道的な書簡」なのだと思うのです。

ですから、こんなに大勢の先達がそのように生きてきたのだから、その歩みを見習いなさいと言っているわけです。ギリシャ語では、殉教者＝マルティリアは、証人＝マルトウロスという言葉と結び付いて来る言葉です。ですから、キリスト・イエスに召され招かれ、神の僕として生きることは、正に現実の中で自分を滅ぼす力と正面から対決してイエス・キリストを論じる者でなければなりません。それは「言い換えれば、ヘレニズムの文化に対してヘブライズムの思想をもって徹頭徹尾闘い抜き、生き抜いて行くことなのです」これが現実の私たちにはなかなか難しいですね。

教会の中には完璧ではありませんが、ヘブライズム的なものが息づいていますから、そこで語ることは割合簡単です。ところが同じトーンで、同じことを教会の外に出て言った時には、全く通用しなくなってしまう。「だからやめた」ではなく、それを現実の中に通用させて行くことが「福音に生きること」です。それが私たちの生活周辺に拡張されて、そのものの考え方や見方、即ち「イエス・キリストによってすべてのものが贖われている、既に神は勝利していらっしゃって、あなたがたが抱えている問題は、問題ではないのだ」ということを本気になって語り、訴え、信じ、喜んで生きてゆくことです。

勿論、この世は神の御支配の中に、悪の霊が席卷しようとうごめく世界ですから、私たちが思う程にすんなりとはいかないでしょう。

「しかし、時来たらば、神はこの世を完全に神の御支配のもとに治められて、一切の神に逆らう力が根絶される時を与えてくださる」と聖書が約束しています。そのことを待ち焦がれながら励んでゆきましよう、今度は「信仰の忍耐」という問題に結び付いてゆくのです。

「耐え忍びながら待つ」のは、実は「神がくださる終わりの時」で、新しい世界が本当に素晴らしいものであり、この地上において闘わなければならないすべての敵が、神の大きな光のもとに全く力を失ってしまう時が到来する。その時に向けて生かされている、その光を喜ぶ者として今を生きているのだという、その喜びや期待の中で主を待つのです。

だから今、多少それがうまくゆかない、闇の部分が多く入り込んで、そのことの故に悩み苦しむようなことが起こったとしても、そのことに迷わされないでしっかりと見上げるべきものを見上げながら走ってゆこうではありませんか。それは「すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか」というこの言葉の中に表明されていることです。

無鉄砲に行く先を知らないで走るのではない。ここに書かれているように、「私たちのために定められている一つのレース、神の国に至る道を一生懸命で走り抜いて行きましょう」。そこでは、知らない人々はあざ笑ったり妨害をしたり、様々なことをするでしょうけれども、そんなことに怖じ気づかないで、忍耐強く、「来るべき御方が与えてくださる終わりの日、その日を本当に待ち望む喜びをもって、「今の時を、走り抜いてゆこうではありませんか」と言っているのです。

ですから、ここでは「いわゆるキリスト論、大祭司論」を述べて来た著者は「終末論をこんな形で示している」と思うのです。そういう意味ではこの手紙は『完結した神学的な書物』と言うこともできるでしょう。

「救済論があり、大祭司論があり、キリスト論があり、そして同時に、聖餐問題があり、終末の問題がある」ということでは、一応聖書の中で、完結した神学を構築していると言っていると思います。

それはともかくとして、少なくともこの著者が訴えているのは、第②節の中で走り抜きましょうと言っている時に「信仰の創始者また完成者である『イエスを見つめながら』、走り抜こう」と言っていることです。

「あなたがたがたは、そこから目を逸らさないことが、神を信じていることですよ。この御方が既に私たちに信仰をお与えくださり、信仰を完成してくださる御方であることを信じて、今その完成の道程を、全力をあげて走っていこうではありませんか」と言っているのだと思います。

この前、近くの小学校で運動会がありました。その小学校では2年ぐらい前からでしょうか、施設の子どもたちを招いて運動会に参加させているのです。例えば肢体不自由の子ども、知恵遅れの子ども、色々な子どもが来るわけです。そういう子どもたちも競走をするのです。競走しても順位を決めるのではないのです、走り抜いた子どもたちには皆同じご褒美をあげるのです。

その時にですね、途中で止まっちゃう子どもがいるんです。そういう子どもたちを心配そうに小学生たちが見ている、そうするとその子の親が手を振る、そうするとその子は全

く新しくハッと気が付いたように、また「ダーっと」全力をあげて走り出すんです。それを見て子どもたちは「パチパチパチ・・・」と拍手をするんですね。そしてその拍手に励まされて、とうとうゴールインということになるわけですが、**「その時に彼女あるいは彼が『自分の親が見てくれることに励まされて、諦めかけた競走をもう一遍スタートさせる』というあたりを眺めながら、私は「上記の部分はそういうことなのかな」と思ったのです。**

イエスを私たちが見つめる時に、もう駄目だと思ったところから、また力が与えられて走り出してゆける。そういう意味で何時もイエスを見上げながら走り続けることは、私たちが落胆したり、絶望したり、頓挫したり、挫折したりする時に、そこからもう一遍立ち上がって出直すことが許されている、大きな神の赦しと恵みの中にいることを認識できるのではないかなと。

監督者としてとか、怖い目をして見ている誰かさんのようではなくて、親の目のような慈愛の目で見ているイエスを見出すことが必要なのではないか、贖い主キリストは正にそういう御方なんじゃないかと思うのです。

ユダヤ人たちは、ある意味では神を監督者のような形で捉えている。だからその御方の前に完全なものでなければ駄目なんだと考えて律法主義に陥り、自分自身を完結させようとするけれども、キリスト教の信仰はもっと広やかで自由なのです。

あなたがたは「自分自身をどんなに完結させようとしたって、どうせ、元々駄目でできっこないよ」と始めから言っているわけです。神の御霊によって支えられ、神の恵みによって生かされて、神の憐れみによって信仰が与えられているのだから、そんなもの自分ですようと思わないで、あの御方が御力を振り回してくださる、あの御方がまだ生きていてくださる、私たちに息吹を注いでいてくださる、だから頑張ろうと立ち上がってゆく。そういう神の御力に支配され、神の御霊に導かれて生きることなしには生きられない存在が、クリスチャンなのです。

だからこそクリスチャンが、自分の人生の競走を完走するためには「イエス・キリストを片時も忘れず、見上げ続けて走ることなんだよ。しかも、それを色々な形で応援してくれて、そのように『不完全でありながらも、神がゴールを与えてくださった先達たちがこんなに沢山いるのだから』、今の競走を頑張らなさいよ」と言われているのです。

とにかく、先達とか証人とかいう言葉を聞くと「完璧な人」を考えるのですが、私自身はそういう風には読まないですね。

アブラハムが信仰の父と呼ばれたと書いてありますが、私はそこに余計な言葉を入れます。「アブラハム『できえ』、信仰の父と呼ばれた」と。本当の神様を知らなかった人間が神の声によって引き出されて、彼が住んでいたところでは本当の神と出会うことは無理だったので、別なところに引き出され、そこで神と出会った。

「神が祝福を与えてくださり、その証拠に、子どもにこの土地を与えるとの約束を頂いたのに、子どもがないとこの土地は貰えなくなるだろうからと、『心配し、自分で努力して、イシマエルを産んでしまう』そんな男であったけれども、神は祝福の基にしてくださった」。神がその彼を赦し続け、支え続け、用い続けてくださったから、「アブラハムは、信仰の父になれた」のです。

信仰とはそういうものだと思います。私が相応しい存在だからとか何だからという問題ではなしに、私を覚えて、応えて、召して、声をかけてくださった御方が完全であり、諦めない御方であり、本当に忍耐強い御方であってこの私と結んだ契約をとことん成就させようと支えてくださっている、励ましてくださる。「だからこそ、終わりの日に向けて歩む望みが与えられている」と考えていいと思うのです。

ですから、「信仰とは、（神が）望んでいる事柄を確認し、（自分にはまだ）見えない事実を確信することです」という第11章の言葉ですが、「望んでいる事柄」というのは、別な言い方をすると「遙かに仰ぎ見るという事柄」と訳した人がいるのです。

「私たちがこうなってほしいなとか、神があなたがたはこうなるよと言ってくださった完結された雛形を見ながら、そこに向かって歩んだけれども、途中で不安が起きたり動揺が起きたり、あるいは駄目かもしれないと思ったりするのではなく、本当に今、神の望みが私の前にしっかりと置かれているのだ、というふうに確認してゆく、つまり、そこにないけれども現実にあるように見える確信『バーチャルリアリティー』です。だから、ヘブライ人てすごいなと思うのです、その頃から『バーチャルリアリティー』をやっているんですから。

それは、神が与えてくださった御言であり、あの永遠の都であり、そして今あなたが臨場感をもって自分がそこにいるという現実を構築していくことです。そこで神のビジョンを確認し、神がそれを与えてくださることを確信して生きて行くこと。まだそこには住んでいないけれども、そこに住んでいる喜びを具体的に自分の中で反芻し、御心を確認しながら生きてゆくのが信仰なのだ、と言っているのです。

決して苦勞しながら悩みながら生きる姿ではない、「喜んで生きる姿」なのです。しかもそれは、自分がそうなる可能性を持っているから、ということではない、自分には全くその可能性がなくとも、神がそうしてくださると仰った以上は、必ずそうなるのだと信じて生きてゆく生き方、それが信仰なのです。

自分の中に可能性があって、それを信じて生きるんだったら、信仰でも何でもないので。それは正に自分を認めて生きる、自己義認の生き方でしかないのですが、ヘブライ人たちはそういう生き方をして来たのです。

私の中にもその可能性があるから、そんな誤りの萌芽があるから、神は御声をかけてくださった。私たちの周りにある現実の合理主義的な社会では、そういう生き方が当たり前ののです。鯉の稚魚を眺めて、これはすごい錦鯉になれるという萌芽がある奴は、良い池に

入れておく。そうでない奴は、縁日の金魚屋に持って行ってしまふ、ということをやらかすわけです。

そういう萌芽があるからいいんだ、可能性があるから選ばれた、ということとは違うのです。そんな可能性は針の先程にも感じられないのに、いやむしろ全く感じられないのに、神はこの私を選んで、そういう風になることを確信されるかのように、「そうなるんだぞ！」と約束してくださった。その御心を信じるのが信仰なのです。だから「信仰を持っています」と言う時には、すごく大変なことを言っていることになるわけです。

私は詰まらない人間で何にも役に立たないし、神に選ばれたという私を紹介したら皆、馬鹿げていると思うかもしれないけれども、その馬鹿げていることを、私たちの神はやっつてのけられるのです。

この私を、神の国に生きる人間として既に神は捉えていてくださって、今その準備をしてくださっているのです。だからそのことに感謝と喜び、感動を覚えながら今日を生きているのだというのが信仰生活なのですよ、ということになるのですね。

走り抜こうということは、正に喜びをもって走り抜くこと、喘ぎながらじゃないんです。そういう喜びがあるから、今何が起こっても気にならない。神が成就してくださる日をしっかりと確信しながら、じっくりと生き続けることです。

アブラハムが神から召されてから25年子どもがなかったけれども、子どもが与えられるというお約束をひたすらに信じ、やがてイサクを与えられるまで待ち続けた。全く可能性がないのに待つ、しかも喜びをもって待つ、確信をもって待つということが、ここで言う忍耐とか、鍛練とかという言葉と結びついているのです。

<鍛練>というのは、何も苦勞させるとか、辛い目に遭わせるとかではない。「神の御言が成就することを確信し難い現実の中で、尚、その御言を確信し続けて生きられるように、私たちが磨き上げてくださること」です。

「何にもなくとも、神の御言は立つ。」即ち、創世記の初めのように、神が仰ればそうなる。そのことが起こることを、身をもって証し続けていく、それが信仰なのです。ですから、この手紙を読み通して来て、今しみじみと思うことは、「私たちが描いている信仰とか、信仰箇条とか、信仰的な生き方とか、そういうようなこととは、桁外れにダイナミックで大胆な信仰が、私たちに示されているのだ」ということなのです。

その大胆な信仰を示すために、著者が一所懸命語られてきたことが何だったかと言うと、イエス・キリストは比類のない完全な大祭司であられて、人類の罪責の贖いを完成してくださった。もう二度と犠牲を献げる必要がない完璧な自己犠牲を献げられたのだから、あなたがたはもう永久処罰に陥ることは全くないのだという、あのメルキ

ゼデクの大祭司の『大祭司キリスト論』をここで打ち立ててくださったと思うのです。聖書の中には、色々な「キリスト論」が登場して来ます。

例えば「共観福音書」は、イエスが地上においてなされた事柄とか行為を語り続けながら、地上におけるイエス・キリストを崇めるということに重点を置いて書かれているのです。

ところが、「ヨハネによる福音書」は、時代が遅れて書かれた書物ですし、彼が先ず主張しようとしたことは、復活されたイエス、死んで甦られたイエス、その御方が今私たちと一緒にいらっしゃるという意味での信仰を描き出しています。イエス・キリストはそういう御方なのだと紹介しているのです。

「パウロ」は、それとは違って十字架と復活の主、その御方によって私たちは今生かされている、贖われている、そういうキリストを何時も描き出している。「キリストを十字架につけた私」と「にも拘わらず贖いを完成して下さり、甦りの命によって生かされている私」、「尚、罪の渦中の私」と「義とされた私」というものを並立してパウロは書いています。ですから、彼が聖書の中で自分を紹介する時には「イエス・キリストの奴隷パウロ」という言い方をします。

<ドゥーロス；奴隷>ということは、キリストによって自分自身がもう完璧に占領されているということですが、「神によって『昔のサウロ』は死んで、新しい復活の命によって『今はパウロ』として生きています」ということもここでは言っているのです。

しかし「このヘブライ人への手紙」では、そういうところとはまた少し違った角度から「大祭司なるキリスト」を語っています。

その大祭司なるキリストを語っていかうとする時に、どのような形で表現しようとしているかという、「イエスは私たちのために受肉されて生涯を地上において送られた。その中で、イエスは私たちに対して、世に勝利された御方として完全な歩みをなされた。そして十字架に架かって「どうして私をお見捨てになるのですか」と、神に向かって叫びを上げられるまでにイエスは、私たちの傍らにお立ちくださった。しかし犠牲を完成なされたイエスは、その死を超えて新しい命をお受けになり天に帰られた。今、彼は神の右にいて現臨しておられる御方だ。「あらゆる点において、支配をもって共に生きていらっしゃる」というところにキリスト論をもって来ている」のです。

ですから、この手紙を読んでいますと、「この中には『私たちの信仰告白の諸箇条』がきちんと収められている」のです。その意味では、この手紙は「大変重要な手紙である」と言うことができます。

ただそれを説明してゆくために、著者は律法を使い、旧約の(教会)諸儀式を使って語っていますから馴染みにくいところがあって、読まれる機会が多くないのですが、少なくとも、彼がそこで、律法をもって来たり、旧約の諸儀式をもって来ていることは、言い換えれば、私たちの今の礼拝がどうあらなければいけないのか、ということ語ろうとしていることにもなるので、現実的な今日の教会における礼拝論とその指導書としても十分に役立つものであると思うのです。

そのあたりを、著者は第8章で、エレミヤの言葉を借りて『古い契約と新しい契約』という対比で書いています。

そのように、この書それ自体がもっている意味は、すごく広くて深いわけです。

今までご一緒に学んで来たことを振り返ってみましても、そのすべてを学び尽くすことは出来ていないだろうと思います。

どうぞ、また皆さんがたがもう一度、皆さんがたのお力でヘブライ人への手紙を読み直してくださり、そして、今申し上げましたような事柄をかい間見て頂くことが出来れば、皆さんがたの信仰の励みになり、力になるのではないかと思います。(1998年10月24日)

32回説教

「その日、風の吹くころ」

創世記3：1～15（聖書協会共同訳）

日本基督教団峡南教会牧師 森 容子

松山先生の講述の最後の巻の説教テキストとして、創世記の原罪物語を選びました。キリスト者以外にもよく知られているストーリーで、古今東西、実に様々な聖書解釈がありますが、出来るだけ御言に忠実に、かつドラマチックな構成をもって、テキストの起承転結を皆様と辿りながら、アダムとエバへの、更に私たちへの、主の深く広く気高い御心を味わい知り、主をより深くお慕いし、主の御心に適う者へと近づけますように。

<起>

創世記2章で、神様はエデンの地に、見た目もよく味もよい実を持つあらゆる木を生えさせられました。特に園の中央に、命の木と善悪の知識の木の二本の木を生えさせられました。主は人（アダム）に「園のどの木からでも取って食べなさい。ただ、善悪の知識の木からは、取って食べてはいけない。取って食べると必ず死ぬことになる。」と厳命されました。

その後、神様は、人のあばら骨の一部から女を創造され、3：20に至って、人がその妻に、「命を与える者」という意味でエバと命名したと記されます。アダムの名が出てくるのも3：21からです。それまでは、人、女、時に夫、妻と記されているこの聖書ストーリーは、アダム、エバという個人の問題ではなく、もっと普遍化した問題意識をもって取り扱っていることにも、着眼して頂きたいと存じます。（私は「女」という表現をあまり好まないで、勝手ながら、以下は「女性、彼女」と表記させて頂きます。）

そして、3：1では、神が創られたあらゆる野の生き物の中で、最も賢いとされる蛇がやってきて、女性に「神は本当に、園のどの木からも取って食べてはいけないと言ったのか。」と、逆説的な質問をしたのです。彼女は主から直接には聞いてはいないのですが、蛇に答えました。「私たちは園の木の実を食べることはできます。ただ、園の中央にある

木の実は、取って食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないからと、神様は言われたのです。」と。それは主の御言の正しい復誦ではありません。「触れてもいけない、死んではいけないから」とは、神様は言っておられませんでしたが、彼女は恐らく人から告げられたことを、その通りに蛇に告げたのでしょう。

今や人にとって女性は「私の骨の骨、肉の肉」という、自分と一体である最愛の妻です。人は長い期間をたった一人の人間として過ごしてきましたから、もう孤独になりたくなかった、主から与えられた女性を失いたくなかった、どんなことをしてでも彼女を死なせずに守り抜きたかったのです。そんな人にとって、神様は絶対者であられましたから、食べればと死ぬと言われた実のことを、人は信じ、自分にも彼女にも嚴重警戒したのです。

エデンの園の中央には二本の木があり、主から止められたのはその内の一本、「善悪の知識の木」だけでした。が、二本の木の実の両方とも食べてはならないと、人は女性に厳命したのです。禁止するの“禁”という字は「二本の木を示す」と書きますが、心配性となった人は、彼女が違えないように、二本とも駄目だと禁止したのです。そして更に、二本の木に「触れてもいけない」と、これまた過剰な注意をしました。女性の言葉の「死んではいけないから」には、「触れただけでも死んでしまうよ」という、神の御言を上まわる、人の嚴重すぎる言い付けが表わされています。また、生まれ立ての女性には、「死ぬ」と言うことの意味がよく分かっていませんでしたし、禁止事項に踏み込んでみたいという無邪気な好奇心は、むしろ人一倍でした。でもそれは、彼女に限ったことではありません。昔話の「鶴の恩返し」や「浦島太郎の玉手箱」に象徴されるように、人間の性（さが）というものです。ですから、生まれ立ての純情無垢な女性に対し、死ぬという危険を帯びた「善悪の知識の木の実」に2重3重の鍵をかけたくなる人の気持ちはよく分かりますし、それは人にとっても、自身の好奇心にしっかりと鍵をかける必要があったからでしょう。

<承>

しかし、狡猾な蛇は更に、3：4で女性をこう唆します。「いや、（その木の実を食べても）決して死ぬことはない。それを食べると目が開け、神のように善悪を知るようになることを、神は知っているのだ。」と。それで、とうとう好奇心と誘惑に負けて、彼女はいかにも美味しそうなその実を取って食べてしまいます。そして彼女は、一緒にいた夫（ここでは人でなく夫）にも与えたので、彼も食べたと記されます。それ以降、二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、いちじくの葉をつづり合わせたもので腰を覆ったとあります。

ここで私は、はて？と首を傾げます。ここに描かれている人は、これまで嚴重な忠告のバリアを張って危険な木の実から必死に守ってきた妻が、なんと、その実に手を伸ばし、もいで食べようとする一連の動作を、全く止めていません。彼は彼女のすぐ傍らにいたに相違ないにも拘らず、誘惑者の蛇との会話にも一切口を挟まず、止めようとしません。そしてその実を食した彼女から手渡されたもう一つの実を、素直に自分も食べるのです。

聖書の記載では、自然な誘惑の流れの中、ごく自然に二人が順に木の実を食べたかのような印象がありますが、これは、まったく不自然で不可解な事件です。いったい、人の心中に、どんな変化が生じたのでしょうか？

これを、彼らにとって大きな誘惑のきっかけとなった蛇の言葉から考察しましょう。蛇は女性に「神様は、あなたがたの目が開けて、御自分のように善悪を知る者となってしまうことを恐れておいでなのだ。そのため、素晴らしい善悪の知識の実を食べさせないようにされているのだから、食べても決して死ぬことはない。」ということ告げました。

「神様のように豊かで完全な知識を持ちたい」というのは、彼ら二人、特に人の究極の願いであったのかもしれませんが。園において、全く自由意志、全く自由選択権を発動されるのは、支配者なる神様だけでしたから。自分も神様と同レベルの知識を持ち、神様抜きでも、神様無しでも生きられる者になりたい、こうした高慢、傲慢にもほどがある願いが、既に人の心に巣くっていたのかもしれませんが。

また、「善悪を知る」とは、善悪を判断する尺度を、神様だけでなく、こちら側も握ることだと人は考えたのかもしれませんが。既に、神様の被造物に対し、名前を付けることを許されていた人は、動植物1つ1つの名付け親になることを十分楽しみながら、まるで自分も創造主の一人になったかのような、大きな錯覚に陥っていったのかもしれませんが。

いずれにせよ、彼ら二人はまんまと蛇の術中に嵌って禁断の実を食べてしまいました。「知識の魅力に陥る」ということは、賢者ソロモンの墮落を連想させることでもあります。

また、厳密なことを言えば、黙って妻に先に実を食べさせた夫に、臆病とずるさが潜んでおり、更に、妻を死の天秤にかけてでも、その実を試したいという冷酷な欲望や、神様への背信の言い逃れの備えとしての妻の存在が、既に夫の算段にあったと申しましたら、言い過ぎでしょうか。そもそもこの物語の問題の発端は、蛇に唆された妻に対する、夫の急激な無視、無関心、無感動（これは愛の反対語）から始まった、とも言えるのです。

そして、ともかく、実を食べた彼らが直ちに死ぬことはありませんでしたから、蛇の言っていたことの少なくとも一つは当たっていたのです。しかし、これは、決してしてはならぬ「神様を試す行為」であり、「御言への反逆、背信」でありました。

こうして、神様との約束の一線を越えてしまった彼らは、今まで神様に愛され守られて、少しも恥ずかしいという感情はなかったのに、もはやありのままの姿、裸の姿ではいられなくなってしまいました。ですから、この木の実の名に冠せられた『善悪の知識』というのは、「善し悪しを弁え、善い判断に基づく善い行動がとれるようになる知識」というよりも、むしろ、「己の内にある悪や罪という闇の部分に気づきを与えられる知識」と言えましょう。

こうして、実を食した彼らは、自らを卑しいもの、恥しいものとして、いちじくの葉に象徴される神様以外のもの（つまり、神の御言や神の愛以外のもの）でその身を覆い隠そうとします。しかしながら、いちじくの葉は少し時間が経てば乾いてガサガサになり、ガサガサの覆いは少し動けばバラバラと外れてしまいます。それは、神様への不信に捕われた人間の、本当に憐れで見ずばらしく、惨め極まりない姿を露呈しております。

< 転 >

8節冒頭の「その日、風が吹くころ」、これはなんとも神秘的で清々しく、新しい展開を予感させる言葉で、説教題にも選ばせて頂きました。「その日」というのは、聖書の中では特別な「神の時」を表す言葉であり、「風」もまた、ご聖霊を表す特別な表現です。

「その日、風が吹くころ」というのは、人とその妻が取り返しのつかぬ、神様への背信

の罪を冒してしまったその日の夕べでありましょう、パレスチナでは午後遅くに西風が吹くと言われております。彼らと蛇との一部始終をじっとご覧になっておられた神様が、霊の風をまとわれ、満を持してここに登場されたのです。

神様が私たちの人生に顕現なさる時、それは、何かが極まった時と言われます。痛み、悲哀、絶望に襲われた時、死の淵に立たされた時、「なぜ！ どうして！ ああ、どうか、助けてください！」と叫び祈る時、現実のあまりにもの苦しみに喘ぎ、もはやこれまで、と思う瞬間、そんな刹那に、主はきつと立ち現れて下さいます。このエデンの園における彼らも、もう、にっちもさっちもいなくなり、神様への罪が極まった状態にありました。

主は厳かに、木の中に隠れている人を呼ばれます、「どこにいるのか？」と。主は、人の冒した罪を責めるべく問うておられるのではありません。人の心の在り処について問うておられるのです。「人よ、お前はわたしを離れて、どこに逃げ隠れしようとしているのか？」と。それは、私たちが日々の信仰生活の中で幾度となく主から問い質されることでもありましょう。主の御前を離れて、弱く罪深い私たちが生きられる場所がどこかにあるのでしょうか？ 他を探せば、そんな場所が誰かに用意されているのでしょうか？

いや、どこにもありません。そんな私たちを、私たちの神様は、神様の側から探し求めてくださるのです、「あなたは、どこにいるのか？」と。

人は、主のみ光に照らし出されて、もはや逃げおうせず、震えながら神様に申し上げます。「私はあなたの足音を園で耳にしました。私は裸なので、怖くなり、身を隠したのです。」すると神は「裸であることを誰があなたに告げたのか？ 取って食べてはいけないと命じておいた木から食べたのか？」と問い詰められます。

人はいよいよ答えに窮し、主を怖れて縮み上がり、「あなたが私と共にいるようにと与えてくださった妻、その妻が木から取ってくれたので私は食べたのです。」と、神の御前に首謀者としての妻を突き出します。かつて「私の骨の骨、肉の肉」と礼賛した妻への熱愛は、我身の保身と引き換えに、無残にも投げ捨てられます。それと同時に人は、こともあろうに、妻の創り主なる神様にも、自分の罪責をなすりつけているのです。

それを静かにお聞きになっておられた神様は、今度は女性の方を振り向かれ「何ということをしたのか。」と詰め寄られると、彼女も、蛇に騙されて食べたのだと弁解し、神様の御前における二人には、陳謝と懺悔の言葉は、一言もありません。

これが所謂「知恵がついた、賢い者になった」ということなのでしょう。彼らは、唯必死に自己弁護に終始しますが、そんな言葉こそが、自らの罪を露呈していることに気づきません。そして、賢い蛇は元々このような展開を予想していたのでありましょう、不気味に口をつぐんでおります。

これらの姿を神様はどうご覧になったことでしょうか？ 主なる神は、人と女性と蛇の行状、心中をすべてご存じです。ですが、神様は、彼らを袋小路に追い詰め、土下座をさせるまでギューギュー責め立てることは為されず、問いかけの中にも、弁解や釈明の余地を残され、悔い改めを促すために、穏やかな物言いをしておられます。

神は彼らのことを彼ら以上にご存じですから、その弱さ愚かしさ情けなさを、甚く憐れまれた、悲しまれたことでしょう。「なぜ、わたしに背き、わたしを試すようなことをす

るのか？ まだ分からぬのか。お前たちは裸ではない、私が、この私が、どんな時もお前たちを包んでいるのではないか。なぜ、このわたしを信じ切れぬのか！」と。

その先の15節で神様は、蛇に対して罪責を問われ、「このようなことをしたお前は、あらゆる家畜、あらゆる野の獣の中で、最も呪われる。お前は這いずり回り、塵を食べることになる。」と告げられました。この蛇への厳しい宣告は、人間が裡に飼っている悪や罪、つまり神様に反逆する「傲慢やおごり高ぶり」への断罪となりうる御言です。

更に神様は、蛇に向かっては「お前と女、お前の子孫と女の子孫との間に、わたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕く。」と宣告されます。「蛇の子孫と女の子孫」という言葉は共に複数形ですから、イエス様など、ある特定の子孫を指しているわけではありません。これは人類の歴史において、知識探究のために繰り広げられる、神様に対する背信への絶えざる誘惑が預言されている御言と思います。そして、それらの誘惑の駆け引きに「敵意を置く」と主が明言されていることに、留意しなければなりません。

一方、「彼はお前の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕く。」という御言の主語は共に単数形ですから、世の人心を惑わす蛇サタンと、御子イエス様との地上での壮絶な戦いが、ついにはイエス様の十字架上に及び、人類救済者なる主の勝利として描かれていると考えられます。

<結>

ここで再び、「善悪の知識の木からは取って食べてはいけない。・・必ず死ぬことになる。」という神様の禁止事項に対し、彼らが背いて、神様を試みた罪、原罪と呼ばれている罪について考えてみましょう。

神様の定められる限界や禁止を常に考慮に入れて生きるということは、どこまで御心に即して自己管理、制御ができるかということです。このことは旧約における絶えざる問題であり、ダビデのバトシェバ事件、ティルス王が自分を「神である」と宣言したこと等が挙げられます。ヨブ記38：10-11でも神様は言われます。「境を定め かんぬきと扉を設けた。『ここまでは来てもよいが、越えてはならない。あなたの高ぶる波はここで止められる』と。」新約の福音書においても「『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある。」とイエス様はサタンを斥けられます。禁を冒す、則を越えて神様を試す、という行為は、旧約においても新約においても、赦されざる大罪なのです。

神様は、女性次いで人が禁令を破ったその場で、食べた木の実を用いて即座に命を取ることでも無論お出来になりました。しかしそうはされませんでした。神様は、自らの手で創造され、これまで大切に育てられた彼らをおろそかにせず、尚も「我が子」として愛された、愛さずにはおられなかった、その命を尊しとして慈しまれたのです。彼らが創り主なる御自分を裏切り、反逆し、御前から逃げ隠れするような者たちであろうとも・・。

その後、神様は、裸の人と女性に、革の衣（主の贖いの象徴）と、彼らの名前、アダムとエバを改めて着せかけてくださり、「人は我々の一人のように善悪を知るものとなった。

さあ、彼が手を伸ばし、また命の木から取って食べ、永遠に生きることがないようにしよう。」

と、エデンの園を追放されました。けれども、慈悲に富む神様はエデンの外の世界もすで

に創造されておられ、この日の彼らのために既に準備をされていたのです。つまり、神様は、彼らがエデンの園という温室を出てゆくべき時期を、既に計らっておられたのです。

その日、吹き渡る霊の風に背中を押されるように、エデンの園をすごすごと出て行った彼らは、それから額に汗して自分たちの手で土地を耕し、苦痛と苦勞を重ねて子どもたちを産み育て、神様の創造の御業に参画するという新たなステップへと歩き出しました。ここでは、人生の嵐が吹き荒れ、地震が起こり、稲妻が轟くというような大きな試練も多々待ち受けていましたが、そこには、真に生きる歓びの手応えも、日々神様と共なるこよなきお導きも幸いも確かに存在し、神を崇めて暮らしたのです。

「その日、風の吹くころ」・・・それは、神様の御霊のかぐわしい香りと共に、人類の壮大な救いのパノラマが幕開けした瞬間です。そこから時は流れて、私たちも今、同じ霊の風に吹き聖められながら、御国へと向かう救いの歴史の中を、唯一善悪を完全に司られる主に導かれて、一步一步を踏みしめてまいりましょう。

お祈り致します。

真実と御慈愛に富たもう父なる神様、私たちは、あなたの仰せを確かに耳に致しました。「あなたはどこにいるのか？」と。そして、祖先アダムとエバのみならず、神を凌駕せんとする者たちの知識へのあくなき欲望、愚かしい貪りが、神様との関係、隣人との関係、そして自分自身との関係という、大切な愛の関係を壊してゆくことを知らしめられました。

私たちは、どんな時どんな状況にあっても、あなたを主なる神様として振り仰ぎ、あなたによって霊、魂が守られ、新生、聖化が完成され、輝く御国にお連れくださることが適いますように。そして、あなたがこよなく愛され導かれた松山幸生先生が、私たちの標として、最期まで貫かれた聖い信仰の道に倣うことができますように、お導きください。

このお祈りを、主イエス・キリストの貴い御名を通してお献げ致します。 アーメン

32回写者あとがき・1

最終回のまとめで、松山先生は12章①節から③節を選ばれたなぜだろうか。

「そこにとどまっているだけでは、恵みを受けたことにはならないのですよ。恵が本当に神の御恵みとなるためには、そこから立ち上がって、御座に近づく行為が生まれてこない限り、信仰は生きたものにはなりません。」「神は約束されたものを、受け継ぐ人々に、ご自分の計画が変わらないものであることを、いつそうはつきり示されました。信頼しきって、真心から神に近づこうではありませんか。」このように私に呼びかけてくださっていると感じました。

「信仰生活を長いこと営みながらも、重なる試練や自分たちの怠慢や罪の様々な誘惑の中で、指導者や教友(信仰の交わりの中における本当の友達)との出会いが少ないところから、信仰生活に緩

みや迷いが生まれて来る、そうした動揺しがちで非常に危険な状態に立っている信徒、何となく信仰をもっているけれども押し流されてしまいがちな人々を叱咤激励するためにも書かれたものではないか。」(本文2頁)まさに、私のために書かれています。

19歳で受洗に与り、信仰に燃えた学生時代を終えた後、60年間は主の教会を軽んじ、この世の務めに没頭し、不信仰な生活を続けてきました。そしていよいよ人生の最終コーナーにおいて、「恵みの御座に近づきたい」と叫びつつあったときに、この松山先生の大著に出会ったのです。先生、ご存命中にはこの大著の事は知りませんでした。天国からのかけがえのない私への贈り物であったのです。

この32回目は、さらに私への勧告が厳しくなっています。「～～について知っていること」、で終わってはならない。「～～を知っている」、すなわち「人格的な仕方で知らなくてはならないのだ」と論じてくれています。そして、「御言葉が、あなたの心の肉皮に刻まれていなければ、それは意味を持たない。心の中で、体の中で、生活の中で生きて働いて、イエスキリストの事柄を表現していなければ、主イエス・キリストを知ったことにはならないのだよ」と。

「具体的には、御言葉を受け入れ、それに応答すること、それは、あなたが持っている一切の重荷、絡み付く罪を全部キリストに預けること。その時初めてキリストとあなたとの生きた関係が始まるのですよ」と導いてくださっています。

これは松山幸生先生が私の日常生活を見られての忠告でもあります。私は何か問題があると、自分の力でなんとかしようとする性分です。それが過ぎて多忙となり教会生活が疎かになっていました。そしてなんともならず、いたずらに焦り、悩みを抱え込み、裏切られるという結末の多いことに先生が気づかれたのです。過度になんとかしようとするのはあなたの罪だと仰いました。尊敬する松山先生からの「一喝」で私は我に返りました。短い期間でしたが私は必死で先生の教えに縋るように学びました。その時も私はまだこの「ヘブライ人への手紙に学ぶ」の存在を知ることはありませんでした。先生のご召天は2021年5月2日聖日の午前11時、私たちは礼拝中でした。そして、私が「ヘブライ人への手紙に学ぶ」を中古市場で求めることが出来たのは5月12日、「申命記」は5月20日でした。これも偶然の出物で後にも先にも入手できるものではありませんでした。

32回に戻ります。

先生は最後に「神がくださる終わりの時」を「耐え忍びながら待つ」ことを説かれました。

「この地上において、戦わねばならないすべての敵(敵対関係)が、神の大きな光のもとに全く力を失ってしまう時が到来する。その時に向けて生かされている、その光を喜ぶものとして今を生きているのだと言う、その喜びや期待の中で、主を待ち望のです。信仰の創始者、また完成者である、主イエスを見つめながら、自分に定められている道を忍耐強く走り向こうではありませんかと希望と勇気を与えてくださっています。松山先生はまさにその通りの生き方をされた方でした。

32回写者あとがき・2

2021年8月に着手しまして32ヶ月、自分自身の信仰の立て直しをひたすらに願って、この大著に向き合わせて頂きました。ヘブライ人への手紙は「終末の理解について確信がもてず、さまざまな異なった教えにより、その信仰が激しく揺さぶられ、そのような人々に対して勧告と慰め、叱責

と励ましのために書かれた手紙です。」との松山幸生先生のお言葉は、まさしく私に向けられていたと猛省し、関係者の皆様のご許可をいただき始めました。初めは、ただ単に写書すればなんとか私にも理解できる内容と愚かにも考えていました。しかし、初めてすぐに強固な壁にぶつかり私の理性が音を立てて崩れ落ちてしまいました。すぐさま、松山幸生先生の奥様にご相談申し上げましたところ、瞬時にして、これは聖霊のお導きとしか言いようのないタイミングで森容子先生（日本基督教団峡南教会牧師）のご紹介を賜りました。森先生から聖書を写しとる基本原則から教えて頂き、細部に至る推敲を引き受けてくださいました。原著に書かれていない神学的な背景や原典からの解釈をご指導いただき、深い感動をもって毎回楽しく学び続けることが出来ました。

松山幸生先生の説き明かしは詳細を極め、豊かな知識で範囲が広く、また、旧約聖書との関係を丁寧に且つ広く深く敷衍しておられますので毎回の内容が濃厚になっています。時々、省略しようと試みたこともあり、その折には森容子先生と綿密な打ち合わせを5度ないし6度の推敲を重ねて断行した箇所もあります。

第22回からは森容子先生にお願いいたしまして、本文の理解をより分かりやすくする内容の説教を末尾に掲載させて頂きました。こうして私はお二人の師に恵まれ豊かなご指導を頂きました。こうして信仰と健康に恵まれ予定通り完結することが出来ました。そして、目的でありました私自身の信仰は恵みに恵みがまし加わりました。聖書に向かう時間が特段に増えました。主イエス・キリストのお守りとお導き、そして森容子先生のご援助なくしてこのように完結に至ることはなかったと深く感謝をいたしております。

一応の完結をいたしましたが、私にとってはもう一度学び直すことが必要であることをある時点から覚えておりましたところ、最終回の松山幸生先生のメッセージで、「今までご一緒に学んで来たことを振り返ってみても、そのすべてを学び尽くすことは恐らく出来ていないだろうと思えます。どうぞ、また皆さんがたがもう一度、皆さんがたのお力でヘブライ人への手紙を読み直していただく、そして今申し上げましたような事柄を垣間見ていただくことが出来れば、皆さんがたの信仰の励みになり力になるのではないかと思います。」と結ばれておりました。本当に内容の濃い毎回の解き明かしで、先生の息吹を感じる、眠っている私を覚醒させてくださる場面も多々あります。内容の豊富さ故に私は消化不良を起こすこともしばしばでありました。

人の5倍の努力が必要な私への尊いお励ましの言葉を頂き勇気百倍いたしまして、再度学び直しをいたします。このことを森容子先生にお伝えしますと、森先生も同じお気持ちであると仰ってください、又第1回から推敲と助言を賜ることになりました。私自身の個人的な学びの時間を頂き2024年8月から再会を致したく決断いたしました。引き続いてベストピアに毎月掲載をして参ります。松山幸生先生の原著の完了は1998年10月24日となっており、すでに四半世紀が過ぎております。事例が古くなって解説を必要とするところも少なくありませんので、本文の趣旨を損なわない範囲で要約等をして、又、聖書を聖書協会共同訳を採用して、若い方にも読みやすく工夫をしたく存じます。森容子先生の説教を第1回からお願いして形の統一もいたします。

皆様と共に学び希望を共有できることを願っております。2024年3月15日小原靖夫記